

令和4年度全国農業大学校等意見発表要旨

農業大学校名 八ヶ岳中央農業実践大学校 学科名等 研究科 氏名 なかむらりょうた 中村 亮太

1. 課題

学んできた農業と福祉、私の目指す農福連携の形。

2. 意見・提言

1. 課題設定の背景と動機

(ア) 背景と動機

なんとなく福祉の道へ進もうとしていた私にとって、農福連携はあまりにも衝撃的だった。その魅力に惹かれ、自身の手で実現したいとの思いで、大学では福祉を学び、今は農業を学んでいる。そして、福祉と農業を学ぶうちに、考え方が変化してきた。今日までの学びとその変化を踏まえ、私が目指す農福連携の形を伝えたい。

(イ) 取り組んだこと

- ① 様々な野菜の栽培、収穫、出荷といった実践的な学校の実習に取り組んだ。
- ② 大豆や花豆を栽培し、収穫した花豆を活用し、養護学校へ調製作業の依頼、また地域住民の方との交流する企画を立案した。
- ③ 農家研修にて、農福連携に取り組む社会福祉法人の現場研修に参加した。

(ウ) 成果

- ① 農作業の大変さや難しさ、経営の厳しさを痛感した。
- ② 仕事を求めている人たちがいること、農を通じて地域とのつながりが生まれることを学んだ。
- ③ 「農業のある福祉」という農福連携の1つの形を知った。また、現場の難しさを知った。

2. 意見・提言の内容

(ア) 主張

農業と福祉の課題にこそ、可能性があると思う。「誰もが生まれてきた理由を持っている。」これは、大学で学んだ最も大切なことの1つだ。そして今は、そのチャンスが少ない。一方、農業は人口が減少し、人手が足りていない。勘や感覚的な作業が多いのも課題だと思う。

大豆等の豆類は、長期保存ができ、味噌や豆腐など様々な加工ができる作物である。このことから豆類は、多様な仕事を創り、農業と福祉を繋げていきやすい作物であると私は考える。野菜の種類だけ、可能性は広がっていくだろう。見方を変えれば、チャンスに変わるのだ。農業の1つ1つの作業が、手間ではなく、価値ある仕事となり得ることを知ってもらいたい。

(イ) 将来の夢

将来は、新規就農し、農家の立場から農福連携に携わりたいと考えている。いつか、自分の畑を、様々な人にとっての働く場所、集まる場所としていきたい。そして、農業という仕事が広い意味で貢献できる、そんな農福連携を目指していきたい。